



平和への想いをつないでいくために

私たちの戦争体験談

戦後74年が経ちました。戦争・被爆経験者は徐々に少なくなり、戦争の記憶は薄れつつあります。京都生協では、戦争の記憶を次世代に伝え、平和への想いをつなぐ取り組みを行っています。コーポロ5月号で募集した戦争体験談の投稿から、語り継ぎを1件、体験談を3件ご紹介します。

戦時中の辛い体験談に耳を傾けて

藤原 真由美 (54歳)

両親から疎開の話聞いたことがあります。父は東京で生まれ、戦争が激しくなった小学5年生の時に、親戚がいる京都府船井郡に疎開しました。周りは山ばかりで、唯一あった郵便局で仕事を手伝っていました。一晩中歩き続けて山を越え、電報を届けたこともあったそうです。父は船井郡から東京の家に一時的に戻り、家族が揃い次の疎開の準備をしていた時に終戦を迎えました。終戦から3日後、零戦が「政府は降伏したが、我々は最後まで戦う！」というビラを空から撒き、それを警察が素早く回収していたそうです。その後、開拓のために家族で宮崎県に移り住みました。父は中学へ入学後、しばらく机と椅子ばかり作らされて授業は受けられなかったそうです。

母は京都市内で生まれ、昭和20年3月に綾部の中筋に疎開しました。京都駅では遠足気分の子どもたちに対し、親は最後のお別れかもしれないと泣いたそうです。母を含む身体の丈夫な子どもたちは一番遠い安場公会堂で生活しました。晴れの日はわらじを履いて、雨の日は裸足で登校しま

した。京都市内では白米は貴重でとても食べられませんでした。綾部では白いご飯をいただいたそうです。

終戦の日は大切な話があると知らされ、正午にラジオの前に座っていましたがよく聞き取れず、翌日の新聞で日本が負けたことを知りました。先生が「君たちがかわいそうだ」と言って泣き出したので、つられて子どもたちもわんわん泣いたのです。

それから2カ月後にやっと京都市内へ帰り家族と再会しましたが、食糧はなく、鴨川に行って雑草を採ったり近所に食べ物を分けてもらったり、祖母の着物を手放したりして生活したそうです。たんすからどンドン着物がなくなっていくのを見て、子どもながら心がとても痛んだのを覚えているとのことでした。

私の両親は高齢ですが、子どもの頃の辛い体験があって今の姿があるのだと改めて思いました。便利な物に囲まれた生活が当たり前となっている今、戦争を体験した方々の話に耳を傾け、関心を持ち続けることが大切だと思います。



死ぬような苦しみを味わった戦争と引揚げ

岡島 富美子 (80歳)

私は7歳の時、サイパン島の先にあるテニアン島で戦争に遭いました。

テニアン島には日本人がたくさんいて、サトウキビ栽培をしていました。父が働く飛行場には、空襲であつと言う間に爆弾が落とされました。父も爆弾でケガをしましたが、自宅まで逃げてきて助かりました。B29が空いっぱい飛んで、バラバラと爆弾が落とされました。家も、周りにあったパパイヤやマンゴーなどの果実の木も全部飛び散り、防空壕の屋根も飛ばされました。母が「絶対動くな。空から敵が見ているから、飛行機が見えなくなるまでピクリともするな」と言い、親子6人は助かりました。夜になるのを待って、近くの洞窟に逃げました。洞窟の中は暑く、たくさんの人でひしめきあって、大変なところでした。

どのくらいそこにいたのでしょうか。洞窟も見つかってしまい爆弾が飛んでくるので、スコールの降る夜、暗くて何も見えないなか、みんなでジャングルをめざして逃げました。ジャングルの中にもたくさんの人がいて、食べ物はありません。日中は暑くて苦しく、その辺の青草を手でむしり取り、腹に巻いてしのぎました。夜になると海岸に這うようにして出て行き、海水をたらふく飲みました。雨の日は木の葉の水をなめ、食べ物がない苦しみを味わいました。

そんなある日、日本は戦争に負けました。「ジャングルの中にいる日本人、出てきなさい」とスピーカーから聞こえて、父は旗の代わりにフンドシを挙げました。アメリカ人に一人ひとり検査されて

持ち物を取り上げられ、チョコレートやカンパンなど、たくさんの食べ物をもらいました。案内された場所は、バラ線*の中のバラック小屋でした。夜になると女の人をさらっていく外国人がいたので、「夜は便所であっても絶対に外に行くな」と言われました。農業を希望する人はバラ線の外で働く場所を与えられ、畑仕事中は豊富に食べ物を与えられましたが、バラ線の中に持ち帰ることはできませんでした。

そんななか、日本に帰れることになり、一人6貫目*2の荷物1つだけ持って、船で浦賀*3に送られ、宮城県の遠刈田温泉のあたりをあてがわれました。その日から何一つない山の中が住み場所となりました。持ち物は1人3枚ずつの毛布だけ。笹を刈って、木を組み合わせてなんとか住める所を作り、鉄兜を鍋にして、スズ竹を箸に、拾ってきた空き缶を茶碗にして、その辺の雑草を食べました。

戦争に負けた日本。「死んだ方が良かった」と母を責めた日もありました。「この紐で2人で死んで」と言った時、母が私をちぎれるくらい抱きしめて泣いた日のことが忘れられず、今でも胸の内が苦しくなります。

父と母と私と、1日の生活のために毎日山仕事で学校にも行けず、本当に死ぬような苦しみのなか、中学卒業後に一人で家出をしました。京都へ出てきて理容師の道を進み、今では理容室も持ち、老人ホームのボランティアをしながらコツコツ働いています。

※ 有刺鉄線

※2 重さの単位。1貫目は3.75kg程度

※3 現在の神奈川県横須賀市の東部